北東京フィルハーモニーオーケストラ

conductor
大河内雅彦

1st violin
＊＊＊＊＊◎
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

2nd violin
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

viola
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

cello
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

contrabass
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

flute
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

oboe
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

clarinet
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

fagotto
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

horn
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

trumpet
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

timpani
＊＊＊＊＊

trainer
佐々木実美(弦)
大成　雅志(管)

staff
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

special thanks
＊＊＊＊＊
ご来場の皆さま

※50音順
◎：Guest Concert Master

当団について

北東京フィルハーモニーオーケストラは、東京都北部～埼玉県南部を主な拠点とするオーケストラです。
当オーケストラでは、主に次のような点を創団の精神に掲げています。

・オーケストラとしての語法を持つこと。
・このオーケストラのスタイルを持つこと。
・同じ仲間と個人としても成長し、さらにはオーケストラとして発展させていくこと。

これらの精神は、より大きな曲に取り組む際にも大切にしていきます。

【ご支援のお願い】
私たちは常設のオーケストラとして、創団の精神を大切に、これからも活動してまいります。引き続き、皆さまと音楽の空間を共有できるように努めてまいります。私たちの継続的な活動のために、何卒ご支援を賜れますと幸いです。
（ロビーにて募金箱を設けております。）

【アンケートのお願い】
私たちは、皆さまに更に素敵な音楽をお届けできるようこれからも尽力してまいります。
今後のより良い活動のため、是非本日の率直なご意見をお寄せください。

第2回定期演奏会情報

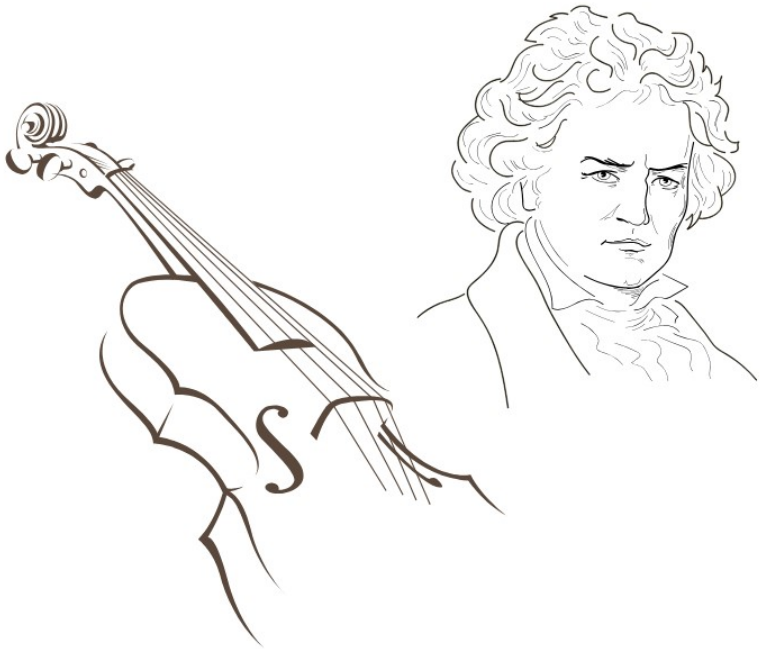
第2回の演奏会の開催が決定いたしました。皆さまのご来場心よりお待ちしております。
日時：2026年1月17日(土)　午後公演　　会場：彩の国 さいたま芸術劇場 音楽ホール
曲目：メンデルスゾーン　「フィンガルの洞窟」より序曲　Op.26
　　ハイドン　　交響曲第92番　「オックスフォード」　Hob.I:92
　　ベートーヴェン　　交響曲第５番　Op.67

NORTH TOKYO PHILHARMONY ORCHESTRA

＊団員募集＊
第2回定期演奏会に向けて団員募集中です！
私たちと是非素敵なアンサンブルを目指しませんか？
練習日：隔週日曜日夜18時～21時　会場：赤羽周辺
お問い合わせ先：north.tokyo.po@gmail.com

NTPOホームページ

北東京フィルハーモニーオーケストラ
第1回定期演奏会



彩の国 さいたま芸術劇場 音楽ホール

2025.4.26

13:15 開場　14:00開演

ご挨拶

私たちは、2024年2月に準備期間を経て活動を開始した新しい常設のオーケストラです。白紙から始めたものの、音楽に正面から向き合って、向上心を持ち続けることを大切にする、想いを同じくする多くの仲間が集まり、ご指導陣の下、真剣に音楽作りに取り組んでいます。本日、初めての演奏会を迎えますが、そのような私たちの想いを乗せた音楽を同じ空間で共有いただけますと幸いです。

幹事長　N.O.

プログラム

ベートーヴェン　交響曲第１番　ハ長調　Op.21

ベートーヴェン　バレエ「プロメテウスの創造物」より「序曲」 Op.43

ーーーー　休憩　20分　ーーーー

ベートーヴェン　交響曲第８番　ヘ長調　Op.93

指揮
ゲストコンサートマスター

指揮
大河内 雅彦

1971 年、愛知県生まれ。愛知県立岡崎高校を経て、東京藝術大学器楽科卒業。 これまでに指揮をハンス・グラーフ、カール・エステルライヒャー、湯浅勇治、 小松一彦、広上淳一の各氏に師事。
2002 年 4 月より東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団の指揮研究員 として飯守泰次郎・矢崎彦太郎両氏のもとで研鑽を積む。同団副指揮者を 経て、2007 年 6 月より 2010 年 9 月まで、東京シティ・フィルのアソシエイト・ コンダクターを務める。この間に同団の 100 公演以上を指揮。
またこれまでに広島交響楽団、日本センチュリー交響楽団(旧大阪センチュリー交響楽団)、Osaka Shion Wind Orchestra(旧大阪市音楽団)、 シエナ・ウインドオーケストラ、仙台フィルハーモニー管弦楽団、名古屋 フィルハーモニー交響楽団、九州交響楽団、東京都交響楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、大阪交響楽団(旧大阪シンフォニカー交響楽団)、中部フィルハーモニー交響楽団、東京佼成ウィンドオーケストラを指揮。
オペラの分野では、日生劇場開場 50 周年記念公演「メデア」および「リア」に、 音楽スタッフとして参加。14年12月には、マケドニアの首都スコピエと第ニの都市ビトラにて、マケドニア国立オペラ・バレエ劇場の「夕鶴」公演(協力:東京オペラ)を指揮する。この他に「フィガロの結婚」、「魔笛」、「椿姫」(抜粋)、「奥様女中」、「ある水筒の物語」を指揮。
第 49 回ブザンソン国際指揮者コンクールセミ・ファイナリスト。
2006 年度より上野学園大学音楽文化学部において、オーケストラと指揮研究科(~2016年度)の非常勤講師を務める。
またこれまでに多くのアマチュアオーケストラとも関わってきており、慶應義塾ワグネル・ソサィエティー・オーケストラ、アンサンブル・コンソルテ、鹿児島大学学友会管弦楽団などを指揮してきた。北東京フィルハーモニーオーケストラを創立時より指揮。

ゲストコンサートマスター
佐々木 実美

東京音楽大学、同学大学院科目等履修生、ハンガリー国立リスト音楽院卒業・修了。
ヴァイオリンを原田大志、江藤俊哉、ゲルハルト・ボッセ、景山誠治、サバディ・ヴィルモシュ、高木和弘の各氏に師事。
フィンランド・ロヒア音楽祭オーケストラ演奏会にてソリスト、ブダペスト・スプリングフェスティバルにて演奏するなど、ソロ、室内楽、オーケストラ、スタジオレコーディングと国内外で幅広く活動を展開。中洲ジャズ出演やL'arc en ciel、中西圭三、池田聡などのアーティストのバックを務めるなどジャズやポップスのサポートも行う。
南日本音楽コンクール審査員や、山野楽器での指導など後進の育成にも当たっている。
池袋フィルハーモニー管弦楽団、イル・テアトロ・アルモニコ・イケブクロ、北東京フィルハーモニーオーケストラトレーナー。
2024年、ソロアルバムCD『Gratitude』リリース。

プログラム・ノート

今は亡き僕の師匠は「楽譜は、それが書かれた時代よりも過去の視点から読みなさい」と言っていた。
歴史に名を残している「名曲」に共通するものは何か？若い作曲家は先輩作曲家から何を「受け継ぎ」、何を「付け足す」のか？
「個性ある」作曲家は後世に名を残し、そうでない作曲家は歴史に埋もれていく。本日の主役ベートーヴェンも、そんなプレッシャーを感じながら創作活動をしていたはず。彼の音楽の「何が面白い」のか？彼の「個性」とは？
今回はハイドンとモーツァルトとの関わりからベートーヴェンを眺め、今日演奏する曲目の「新しさ」について書いてみたい。　(大河内 雅彦)

ベートーヴェンの生涯と、その時代

1732年　ハイドン誕生（没1809年、38歳年上）
1750年　（J.S.バッハ没）
1756年　モーツァルト誕生（没1791年、14歳年上）
　ハイドンは「バッハが亡くなる18年前」に生まれ、モーツァルトは「その6年後」に生まれている。(ハイドンがモーツァルトの死後に18年も生きていることにも注目！）ハイドンはハンガリーの大貴族エステルハージに約30年間仕えて1790年（58歳）に、モーツァルトはザルツブルクの大司教に約12年間仕え、1781年（26歳）にフリーの作曲家になった。
　2人とも「貴族や教会といった特権階級」に仕え、「求められる注文」をこなしながら、「バロック音楽」の要素を消化しつつ「新しい時代の音楽」（現代からみる古典派）を作り上げていった。ハイドンはアイゼンシュタインという片田舎で「研究費を保証された学者」のように。モーツァルトは若い頃から頻繁に旅をした「国際人」として。
1770年　ベートーヴェン誕生（没1827年）
そして今日の主役ベートーヴェン。
　1770年にドイツのボンで、宮廷楽長の祖父、宮廷テノールの父と続いた音楽一家の三代目として生まれる。父に音楽の手ほどきを受けた後で、ボンの音楽家たちにピアノ、ヴァイオリンとヴィオラを習い、10歳の頃には宮廷楽師となり、教会のミサでオルガン奏者を務めるようになる。
　その後ネーフェ（オルガニスト・作曲家）に作曲を習う。J.S.バッハの「平均律クラヴィーア曲集」やC.P.E.バッハの「歌曲集」が教材にされ、「古い時代」についての教育をしっかり受けていた。
1787年　16歳で「ボンの宮廷楽師」としてウィーンに派遣されるも、母の危篤の知らせでボンに戻る。僅か2週間のウィーン滞在。(この間にモーツァルトに出会い、お互いのピアノ演奏を聴く？）
1789年　19歳。ボンの国民劇場でのモーツァルトのオペラ「後宮からの逃走」「ドン・ジョヴァンニ」「フィガロの結婚」にチェンバロ奏者＆ヴィオラ奏者として参加。（フランス革命　～1799年）
1792年　21歳でハイドンに弟子入りを許される。「ハイドンが認めた才能ある」ボンの宮廷楽師として再びウィーンへ。ハイドンは2回目のロンドン行き準備などのために多忙で、作曲のレッスンは6週間程度？しか受けていなかった。この町の音楽愛好貴族界の中心メンバーであるリヒノウスキー侯爵（モーツァルトにピアノを習っていた！）の邸宅に住まわせてもらう。ここのサロンで貴族や名演奏家などとの人脈を築いていく。

　ベートーヴェンは「作曲するピアニスト」として、ピアノソナタや様々な編成のための室内楽曲を作曲しながら「音楽の形式」や「楽器の扱い」などについて研究を重ね、「交響曲」の作曲のための準備を続ける。
ウィーンの音楽界で認められていくためには、2人の巨匠の作品から様々なことを学びながらも、彼らを超えていく必要があった。

この時代の交響曲とは？

　ハイドンとモーツァルトの交響曲は、貴族や教会といった「雇い主」のために書かれた。交響曲は「セレナーデ」や「ディヴェルティメント」などの延長線上にあった。つまり、客人に対して美味しい料理を振る舞うのと同じように。良い音楽を振る舞う。
　フリーになったハイドンは「パリ」(82～87番）や「ロンドンのザロモン」(93～104番）のために交響曲を書いた。(この間に書かれた88＆92番は大河内推薦の超名曲！！）モーツァルトは「39・40・41番」の3曲（超名曲！！）を、依頼者もなく作曲。(自分のため？）交響曲は「作曲家の芸術と技術の全てを注ぎ込む」最高のジャンルと見做されるようになる。ベートーヴェン当時の音楽界で作曲家として認められるためには、ハイドンやモーツァルトを超えるような「交響曲」(と「オペラ」の両方）で成功を収める必要があった。

そして今日の演奏曲目について。これらの作品の「新しさ」に焦点を当てた、ややマニアックな解説。(メモ書きのような部分が多いことをお許しください）

交響曲第１番　ハ長調　Op.21（1800年初演）

　1800年4月2日、ウィーンのブルク劇場で本曲が公開初演され成功を博す。初めての自身が開催する「自主アカデミー」に於いて。
第１楽章　Adagio molto - Allegro con brio　　序奏を持つソナタ形式
（ハイドンやモーツァルトの序奏では「全員 f で主音」あるいは「優しい主和音」で始まることが多い、という前提があり）
「ハ長調の曲が始まるぞ」と身構える聴衆に対して、
「ド・ミ・ソ・シ♭！！」→「ファ・ラ・ド」
「ソ・シ・レ・ファ」→「ラ・ド・ミ」(「ド・ミ・ソ」ではなく！）
「レ・ファ#・ラ・ド」→「ソ・シ・レ」
　ハ長調の主和音は7小節目で初出。 f での和音の連なりの後で、頂点になるべき所に「sub.p（すぐに弱く)」からの「偽終止」、もう一度 f での和音の連なりから、本当の頂点を経てディミヌエンド。弦楽器の音階が現れて・・・。短いながら、変化に富んだ序奏。
「序奏（Adagio）と主部（Allegro）にはテンポの関連（2倍とか3倍）を持たせる」というのがバロックの時代からの習慣だが、序奏を「Adagio molto（遅い感じを多めに)」、主部を「Allegro con brio（活き活きとした感じを多めに)」と設定することで、(関連のある2倍よりも）「テンポの差を強調」している。
主部 Allegro con brio
　付点のリズムを多用した「弾む」第1主題。sf（スフォルツァンド/「アクセント」の強いもの）の多用。ffの使用。
「優しい」第2主題。 続く推移部は「タカタカ・タン」という電気ショックのような音型。
「p」でスタートした第1主題が「ffでの再現！」(筋肉質だった青年の身体が加齢で二周りほど大きくなり「故郷に錦を飾る」感じ!?）
　僕の知る限りでは前例はない。7番や9番の交響曲でも採用されるアイデアで、ドヴォルザークも交響曲第8番やチェロ協奏曲などで使用。
第２楽章　Andante cantabile con moto　　ソナタ形式
「pp」で「フーガ的な」始まり。「繊細で可愛らしい世界」で同時に「古めかしい舞曲」のよう。
　展開部始めの大胆な転調。「ヘミオラ（3拍子×2小節の中に、2拍子×3回）の連続」
第３楽章　Menuetto　Allegro molto e vivace
　ハイドンやモーツァルトの交響曲の歴史の中で3楽章に定着してきた「Menuetto」を、ベートーヴェンも（気を遣い？）採用するが、「急な強弱の交代」「アクセント位置の頻繁な交代」「大胆な転調」など、内容は「スケルツォ的」。交響曲第2番以降は「Scherzo」。(8番のみ再び「Menuetto」）
（ハイドンとモーツァルトの後期交響曲にも、「Scherzoの精神で書かれたMenuetto」が何曲かある）
第４楽章　Adagio - Allegro molto e vivace　　短い序奏を持つソナタ形式
「可愛らしくかけ上がる」第1主題。「軽やかに弾む」第2主題。管打楽器 vs 弦楽器の「sf（強いアクセント）の応酬」(ビンタの張り合い？）

バレエ「プロメテウスの創造物」より「序曲」 Op.43（1801年初演）　序奏を持つソナタ形式

　序曲なのに何故2曲目に演奏？？　今日は作曲された順でプログラムを組んでみた。
「プロメテウスの創造物」はギリシャ神話の「プロメテウス」を題材にしたバレエで、「序曲」と「導入音楽」の後に16曲の情景が続く。
Adagio - Allegro molto con brio
「交響曲第1番」の始めと同じ和音（和音の重ね方は違うが)。「オレです！ベートーヴェンです！！1年振りです！！！」
　第1ヴァイオリンが「無窮動的（休みなく動き続ける)」第1主題で大活躍。コーダに独特な和音がある。(文字では書ききれないので、演奏でお伝えする）

交響曲第８番　ヘ長調　Op.93（1814年初演）

　交響曲第1番初演から14年ほどが経過。難聴が進行し「ハイリゲンシュタットの遺書」(1802年）を書くも、演奏家としての道を諦め作曲家として生きる決意表明と受け取られている。その後「2番」(1803年)、「3番」(1805年)、「4番」(1807年)、「5番＆6番」(1808年)、「7番」(1813年）と交響曲の作曲を続け、今日演奏する「8番」(1814年）の話へ。
第１楽章　Allegro vivace e con brio　　ソナタ形式
　序奏なしで始まる「ハイテンションな」第1主題。その後の推移部では「火を噴くような」弦内声の刻み（16分音符)。
「優しく」「シンコペーションのリズムを持つ」第2主題は、定型としての「予測される調」とは違う調（ニ長調）で現れ、繰り返しで「予測される調」(ハ長調）になる。その後「大胆なヘミオラ」。
「3番」(英雄）を想わせる、同じ音型を執拗に繰り返す展開部。(展開部の頂点としての）fffでの再現部（第1主題の旋律をファゴットとチェロとコントラバスが演奏)。第2主題。定型としての「予測される調」とは違う調（変ロ長調）で現れ、繰り返しでヘ長調になる。
　コーダ　ヘ長調→変ニ長調（現実逃避!?）　これだけ盛り上げた後で、この終わり方!?
第２楽章　Allegretto scherzando　　展開部を持たないソナタ形式
　従来「緩徐楽章」が置かれる所に、木管楽器とホルンによるメトロノームのような（機械的な）リズムに乗って「優美な」第1主題。その後「スケルツォ的な悪ふざけ」。電気ショックのような「突然のff」。拍子がわからなくなる木管の優しいフレーズ（ストランヴィスキーなら「16分の5拍子」と記譜しただろう）
第３楽章　Tempo di Menuetto - Trio
　メヌエットという言葉は「古めかしく上品な踊り」を連想させるが、アクセントの連打で「やぼったい」始まりは「重たいものに力を加え、少しずつ転がり始める」感じ。一転、第1ヴァイオリンによるレガートの優しい旋律。トランペットやティンパニの「場違いなアクセント」。
　トリオはホルン2本とクラリネットの旋律を、ソロ・チェロが3連符で伴奏。「sub.p（すぐに弱く)」の多用。
第４楽章　Allegro vivace　　ロンド・ソナタ形式
　ロンド形式とは、A-B-A-C-Aのような形で、Aが繰り返され、その間にBやCが挟まれる。このロンド形式に、ソナタ形式の「2つの主題を提示し、展開、再現する」という「音楽の型」を組み合わせている。この形式はハイドンやモーツァルトも交響曲や協奏曲の終楽章に用いているが、ベートーヴェンはこの型を「拡大し、パワーアップ」している。この楽章のメインキャラクターは以下の3つ。
　第1主題　「ラー・ラシ♭ソ・ラシ♭ソ・ラシ♭ソ　　シ♭ー・シ♭ドラ。シ♭ドラ・シ♭ドラ」　この「ラー」の中に「痙攣するような速い6連符」。(伴奏の第2ヴァイオリンとヴィオラも大変！）「pp」で囁くように始まり、さらにディミヌエンドして…。
　第2主題　「ドーソーラ・ラレレミ・ファッソッ」　　第3主題　「ミッミーレミ・ファッファーミファ・ソッソーファソ・ラッラーソラ・シ」
　A（提示部）　第1主題（ヘ長調）→（推移部）→第2主題（変イ長調！→ハ長調）→（第3主題）
　B（展開部①) 第1主題（ヘ長調）→フーガ（ニ長調）→第1主題の音型（イ長調！）
　A（再現部）　第1主題（ヘ長調）→（推移部）→第2主題（変ニ長調！→ヘ長調）→（第3主題）
　C（展開部②) 第1主題（変ロ長調！）→「突然の停止！」→下降音型による転調→上昇音型に変わり→「運命の動機」→第1主題の音型（イ長調！）
　A（コーダ）　第1主題（ヘ長調→嬰ヘ短調！！）→第2主題（ヘ長調）→コーダのコーダ（ヘ長調）